

<h1>互生共環</h1>	No.46	編集発行人
	2015.12.28	〒 189-0013 東京都東村山市栄町 2-23-4-401 東條栄喜 E-mail: eiki.tojyo@tbr.t-com.ne.jp

目 次

巻頭言 制度化された学術研究と民間学術活動	- 1 -
——思想研究をめぐる大学と民間の活動形態——	

晩期安藤昌益の諸課題を整理する	- 2 -
——集団討議と生家再建と地域活動と医学医業と著作集成——	

始めに

- § 1 門人集団への人生訓の作成
- § 2 郷里の生家再興と地域活動の展開
- § 3 息子への引導＝医学・医業の承継
- § 4 稿本『自然真営道』101 巻の集成
- § 5 実に多忙だったと思われる晩年

終りに—実践諸課題と著作編制の間—

近世日本の多世界宇宙・地球外生物論	- 8 -
--------------------------	-------

始めに—天外天・天外生命への関心

- § 1 安藤昌益の転殻論と転定外転定人論
- § 2 司馬江漢の無限宇宙論と生物生存論
- § 3 志筑忠雄の宇宙天体論と生物生存論
- § 4 山片蟠桃の宇宙天体論と生命環境論
- § 5 高橋至時の多世界恒星系無限宇宙論
- § 6 吉雄常三の多世界恒星系無限宇宙論

終りに—近世天体思想史の中の昌益

放談室	- 18 -
<ul style="list-style-type: none"> * 平和学者ガルトゥンク氏の尖閣・竹島への言及 * 東大駒場・狩野亨吉展の印象記 * 乱文濫作と饒舌論考は読まれない * 宇宙天気と地表天気と地下天気 	

編集後記	- 22 -
-------------	--------

〈巻頭言〉 制度化された学術研究と民間学術活動

——思想研究をめぐる大学と民間の学術形態——

(1) 安藤昌益を研究する大学院生の漸増、しかし・・・

最近 10 年ほどの間に各大学の博士課程で、環境思想や公共哲学の分野を中心に、安藤昌益を関連テーマあるいは関連人物として取り上げた大学院生が輩出している。大変喜ばしい事ではあるが、その一方で教員側に関しては、20 世紀後半に昌益の原典注釈や読み下し・現代語訳などを担当した教授たちが相次いで定年を迎え、すでに物故した方もおられる。現在は昌益の読書基盤の研究や他の思想家との比較思想的な研究を行っている教員は僅かに留まり、昌益の思想全般にわたって内在的に探究する向きは絶無に近い状況となっている。しかも今世紀に入ってから重要な一次資料の発見が相次いだものの、その解読作業は大学外の民間主導で進められており、職業的学術教員による寄与はごくわずかにとどまっている。このような状況なので、昌益思想と取り組む大学院生は大学外での研究成果にも広く目を向け、自ら様々な模索を続けて研究を収斂させなければならないと思われる。

(2) 民間活力による昌益研究の進展

安藤昌益思想研究における、こうした民間活力の隆盛は、1987 年の農文協版・安藤昌益全集の完成を重要な契機としてもたらされたと言えるが、最近はそれに加えて Web 上に昌益の原典や関連資料がかなりの程度公開されるようになり、また大学紀要などに載った昌益研究の重要な論稿も Web 上に公開されるようになって、民間での研究が容易になってきたという事情も作用していると思われる。

海外での昌益思想研究の状況も、関連情報が Web に公開された部分に関しては、関心ある人々すべてが対等の立場でアクセスできるので、民間研究者の側も掌握が容易になってきた。

昌益の思想の現代的意義をとらえ、広く普及を目指す活動も、現在は民間研究者の側が大学の職業研究者よりも遥かに熱心であり、重要な実績を上げていると言えよう。

(3) 棲み分ける面と対立競争する面

民間での学術活動と大学での学術研究には、共通する面もあれば相違あるいは競争・対立する側面もあるであろう。学術研究である限り、真理・真実の探求という目的は共通しているとしても、研究の評価基準という事になると、自ずと違いが出てくる。民間学の場合は、研究内容に民衆性があり、表現が平易であり、新たな視点や成果が加わっていれば基本的に歓迎されるであろう。しかし大学での学術研究となると、制度化された様々な基準に合致しているかどうか必ず問われる。先行研究・関連研究を十分フォローして引用文献リストを多く付し、本文外の注釈を多く付け足したりして、人文系論文の形式を十分整えているかどうかは内容の創造性とは別に要求されたり、自身による原典からの直接の読み下しや注釈を条件づけられたり、外国語での概要表記を義務つけられる場合もあるだろう。

その結果、同じ事を研究しても民間学の場合と制度化された学術研究の場合とでは、その取り纏め方と、結果としての研究報告に随分と違った容態・雰囲気醸し出される場合が多々ある。当編集者はこのような事態を安藤昌益研究の分野で随分と体験してきたので、両者の区別意識を持って使い分けている。この区別意識を欠くと、さまざまなトラブルが誘発されていくようで、実際にそうした事態が起こっている。

4) より広く深い研究の進展に向けて

大学関係者の昌益思想研究にも、近世史や思想史の職業研究者以外の分野の教員による有意な昌益論が各方面で発表されている。そうしたことが分かってきたのも情報化社会の進展の一環なのであろう。それぞれ立場が違って、より正確に内容を理解し、新たな研究成果を出して昌益の思想研究が一層、広がりや深さを並行して増進するようにしたいものだ。それがまた、新史料の発掘に繋がっていくだろう。

晩期安藤昌益の諸課題を整理する

——集団討議と生家再興と地域活動と医学医業と著作集成——

はじめに——

本稿では、50歳代半ばからの晩期昌益の諸活動について、その著作と生業の継続との関係に的を絞って問題を整理して論じたい。何か特別に新しい発掘をしたのではなく、これまでに明らかにされて事実に基づいて、合理的と思われる推論を一部交えながら、晩期昌益の重要な活動課題を五点にわたって整理してみようと思う——集団討議の準備、衰退した生家の再興、郷里での地域活動、真方医学の伝承、著作の集成、の五点である。

§ 1 門人集団への人生訓の作成

50歳代の半ばに達して、医師であった昌益は自分の余命がもはや長くないと日常的に感じるようになったと見られる。中期までの海外渡航の意図とか、様々な大言壮語的表現が幾分抑制されるようになり、著作上も初期・中期の進退五行論に基づく記述に四行論の立場で訂正を加えるなどの痕跡を残している——多忙の故に、新たに稿本を書き直すのではなく、部分的改訂・加筆に留めている。

(1) 各地に増えた門人集団に遺訓を残す必要性

まず、門人たちに遺訓を残す事を意識して、稿本『自然真営道 人相巻』において、世界観と思考方法、個人倫理と社会倫理などについて、「活真道論」という表題で、約70項目にわたる訓示的記述を行っている。その逐一的検討を、筆者は既に本誌No.39(2013年7月刊)で論じているので、ここでは繰り返さない。『人相巻』は昌益の医学論の一部としての望診論を展開した内容であるが、そこに人生訓のような内容も抱き合わせて書き込んだと云えよう。(こうした書き方は、他の巻にも見られ、『真斎謾筆』に見られる稿本73巻以後の医学論にも、農論的記述が交錯しているのと同様である。)

筆者は昌益の音韻論の変遷経過分析から、この『人相巻』が晩期初頭に書かれたと推定している。そして約70項目の訓示的内容が更に集約整理された形で、その直後に開催されたと見られる全国集会の資料として使われたのであろう。稿本第25巻の中の「良子門人問答語論」は全国集会の議事録とも云えるが、その前半部の「良日く、・・・」で始まる34項目は、この『人相巻』での人生訓的記述の要約でもある。昌益は全国集会が開かれる前から、こうした人生訓的な事項を弟子たち伝えるべく、準備を始めたと云えよう。

昌益の門人集団は晩期には八戸・大館の地に限らず、京都・大坂・江戸・須賀川・松前などに拡がっていた。昌益はそれらの門人たちに対して個別に当たるだけで無く、共通した人生訓のような内容を取り纏めて提起する必要性に迫られていたと云えよう。自分の余命があと僅かだと悟れば、自然真営道の思想・理論を合わせて、そうした遺訓を作っておく事は必然的な成り行きだったのではないか。

(2) 人生訓「活真道論」は晩期初頭に出来上がった

さきに触れたとおり、『人相巻』は昌益の晩期初頭に書かれたと見られるので、その中に記載された「活真道論」＝人生訓はこの時期に出来上がったと云えよう。全国集会は、それから僅かの後に開催されたと見られるが、現在のところ開催時期に関しては、昌益が大館に移住する直前に開かれたとする見解と、逆に大館に移住後まもなく八戸で開かれたとする見解とが、研究者の中から提起されている。

一方で昌益研究者の一部に、全国集会なるものは開かれず、「問答語論」は儒学の古典『論語』と同様に、昌益没後に高弟・仙確などの手で編集された内容であり、集会の議事録ではないという見解もある。しかし筆者は現在も全国集会説の方が合理的だという観点に立っている——「問答語論」では 16 項目ものテーマに対して複数のメンバーが関連発言をしている事から、集会無しにこうした意見陳述が書面などで繰り返されるのは無理だと思われるからである。(現代のインターネット社会なら、弟子たちが一同に会さなくても交信可能だが。)

ともかく「活真道論」が晩期初頭に出来上がれば、その後で全国集会が設定されるのは可能であり、少なくとも時系列的な矛盾は生じない。

(3) 「活真道論」が更に整理されて全国集会に提示

稿本『自然真営道 人相巻』の「活真道論」では約 70 項目にわたって書かれていた項目が、『真道哲論巻』の「問答語論」では世界観・思考方法が 9 項目、個人倫理が 11 項目、社会倫理が 17 項目で合計 37 項目に整理圧縮されている。「活真道論」でかなり羅列的に書かれた内容が、約半分に縮約されて集会に提起されたようである。

門人たちはこの整理された項目について、導師・良中の講演を聞き、相互討論を深めたと言えよう。「問答語論」のうち、師弟の発言記録部分については第 1 項から第 20 項までが良中の独講、第 21 項から第 40 項までが良中の講述に対する弟子たちの理解が解説的に述べられている。第 41 項から最後の第 77 項までは、弟子たちの相互討論が続き、その中で良中が適宜発言した記録となっており、討論を通じての昌益一門の思想的深化の様相が伺える内容である。

§ 2 郷里の生家再興と地域活動の展開

(1) 次に晩期昌益の大きな課題だったのが、郷里・大館における、衰退した生家の再興と地域活動の展開である。筆者は大館での郷土史研究の成果については不勉強で、かつ昌益の伝記的研究には元々疎いほうなので、この件について特段新しい提起と詳しい議論はできない。しかし晩期の昌益にとって、生家の家運を立て直し、かつ大館での地域活動＝農民本位の村落自治と生活向上を目指した諸活動を展開する事は双方共に必須の課題だったのではないかと見なしている。

生家を再び盛り立てて継続させる事を、単に封建的だとか家父長的だと決めつけるのは不適切だと思われる。近世の農村社会では、家を維持し存続を図る事は土地に定住した本百姓＝自作農として安定かつ自立した農村生活を築く上で、必要不可欠だったと云えよう。

更に昌益の場合、生家を盛り立てる事と自然真営道の理念を实践する地域活動を繰り広げることは二者択一ではなく背中合わせになっていた筈である。平等な社会を築こうとする志向と、自家の存続繁栄を図る私的意図とが未分化だと言ってしまうればそれまでだが、江戸中期の地域社会ではそれ以上を望むのは無理だったと言って良いのではないか。

(2) 昌益が晩年の帰郷に際して、妻子を連れて行かなかった事に対して、これまでに研究者の一部に“昌益は薄情だ”とか、“夫妻を第一倫とするその思想からして本来、家族を大切にす筈の昌益が家族を捨てたのは不可解”といった見解が出された。筆者はこうした見解には賛成できない。昌益には相応の理由があって、熟慮の末に妻子を伴わずに単身帰郷をしたと理解している。

その第一は、自らの余命があと僅かであり、妻子を連れて帰郷しても数年しか家庭生活が保たれないこと、そうすると妻も息子も慣れない地で新たに生活しなければならないから、その先の事まで見据え

ての選択として、妻と息子は八戸に留まる方が、むしろ当人たちの為になると考えたと推量できること。

第二は、安藤家を継続することは、当地で農民・農村生活者として生きる事を意味するから、息子の周伯にそのように要求することは、かえって家父長的強制になると判断したと思われること。実際、昌益は安藤家の跡継ぎには当地の縁者を養子として迎えたのだから、周伯に対しては農家を継ぐのではなく、医家としての大成を望んだと思われる。

なお江戸中期の当時において、50歳代半ばで単身帰郷するという事は、現代人に比定すれば70歳代に入ってから単身帰郷に相当しよう。つまり本人自身にとっては、家族を伴って帰郷するよりかなりきつい日々になる筈だから、家族を捨てただの、薄情だという見方は全く的外れだとしか言いようがない。こうした見解を採る研究者は、おそらくは自分自身が高齢者になってからの単身赴任生活をした経験がないのであろう。

(3) 大館での昌益の日常生活は、農耕労働・医療活動・著作活動・村民教育の各方面にわたって多面的に取り組まれたと思われるが、村民の守農大神と仰がれる一方で、寺社勢力からは邪教をひろめる不穩分子と見なされたようである。そうすると、賢明な昌益は自らの死後に村内の弟子たちへ、寺社勢力による弾圧がやがて起こる事を想定していたと思われる。

昌益は宝暦12年10月に亡くなったが二井田村の「石碑銘」には宝暦11年10月14日付け(=亡くなる1年前の日付)で「良中先生」の「在靈」が刻されていた。この1年のずれを繞って、それを単純な誤記だと理解する説と“生き神”信仰による予定行動説とが交錯している。筆者はこの件については不勉強で、判断を留保している。しかし晩年の昌益自身は、自らの死後に訪れるであろう、寺社勢力からの何らかの反動攻勢を想定し思いを繞らせていたであろう事は考慮したい。

§3 息子への引導＝医学・医業の承継

(1) 昌益は自ら築いた自然真営道の理論と真方医学が、必ずしも完成された内容でなく、特に医学については、まだまだ未完成だと感じていたのではないか。そもそも医学自体に完成があり得ず、時代と共に進歩していくべきもの、という医学観も無かったとは言えない。

その一例証としては、例えば『良中子神医天真』(内藤くすり博物館本)の「感氣死生」の項で、

「医は脈撲の一つ有るを以て百に當る。(中略)更に當るも真治の旨に見へず。」

といった記述が見られる。人の脈拍状況一つと診ても、そこには百の身体状況が現れており、それを更に究めようとしても、真治に達するのはなかなか難しいものだ、といった趣旨の述懐が見られるからである。陰陽五行の医学論に替わって進退八氣互性の医学論を打ち立てたからと言って、それで医学が完全になったなどは到底、昌益も思っていなかったであろう。伝統医学に対する基本的批判・改組はできても、医学論の各方面での具体的展開と技量の深化課題、時代と共に変遷する疾病の変容への対処という事になれば、終局的解決という事態はあり得ないからである。

加えて、昌益には鎖国日本のもとのオランダ社会に対する熱い思い入れがあり、海外渡航にも中年までは意欲があった事から、息子の周伯には若いうちに江戸や京都で更に医学修行を積み、見聞を広めるよう勧めていたとしても、何の不思議もない。こうした理由から、昌益は周伯を大館への帰郷には連れて帰らなかったと云えよう。

(2) 一方で昌益は中期の著作『統道真伝』で、「道に志す者は都市繁華の地に止まるべからざるなり」

と書いているが、これを教条的に適用すれば、息子の周伯に対しても農村生活を勧めたかも知れない。その場合は、真方医学・自然真営道の理論がひとまず完結したものとして、それを父子そろって大館の地で実践すれば事足りるという自己完結的な生き方になるであろう。

しかし自らの真方医学がまだまだ未完成であると認識し、その展開のためにも息子には各地を廻って新たな知見を吸収するよう勧めたことがありうるであろう。また息子自身にとっても八戸での父子相伝の医学論・技量だけに甘んじる事なく、若いうちに江戸や京都で、より広く医学の修学修業を深めたい、広い世間を見ておきたい、という希望もあったと考えられる。こうした事を考えれば、昌益が息子に対しては大館行きを求めなかったとしても、それが直耕道に反するとは短絡直言できないであろう。

(3) 更にまた、自ら立てた自然真営道の思想・理論に関して、“創業は易く、守成は難し”という事態が訪れる事を息子の代に予感して、二代目の役割は創業者たる父とは別な生き方も必要になると論じていたことも有りうるであろう。息子には息子の生き方を自ら見出すように示唆し、その自由度を与えて、大館への帰郷・帰農に従う事を強要しなかったと言えるのではないか。従って昌益は家族を捨てたのではなく、まもなく訪れる自らの死後に備えて、八戸に妻子を残す事で自由な旅立ちをし易くしたと推量する方が合理的に思える。

周伯が昌益の死後間もなく、母親を連れて江戸へ出て山脇東門に入門した事に対して、安永寿延氏は「そのことが確門（昌益一門）との絶縁を意味している」として、「もっとも身近なわが子に背かれたのは、歴史の悲しい皮肉というべきである」とまで論じたが、筆者は以上に述べた趣旨から、これは全く的外れの断定であり、推量の範囲すら逸脱していると思えない。

§4 稿本『自然真営道』101巻の集成

(1) 稿本『自然真営道』全巻集成への神山仙確の協力

最晩期の昌益が稿本『大序』巻の執筆中に絶命し、後半を高弟の神山仙確が補筆した事は多くの研究者に認知されている。最近はこれに加えて、そもそも稿本『自然真営道』101巻の集成が昌益自身よりも神山仙確の積極的な意図で編纂されたのではないかと推量する研究者も現れてきた。

確かに、晩年の昌益は実に慌ただしい生活を送ったと云えるので、自らの著作を全101巻に纏め上げる余裕は無かった、という見解も成り立ちうる。しかし筆者は、少なくとも全101巻の構想だけは昌益自身にあったと考えている——もちろん、神山仙確の協力は生前にもあったのであろうが。この点は今後新たに見出されるであろう史料も含めて、時間をかけて着実な解明が求められるであろう。

(2) 『神医天真』諸巻と稿本『自然真営道』の関係

ここ2-3年の間に新たに浮上した案件として、『神医天真』諸巻と稿本『自然真営道』医学諸巻の関係問題がある。題名に「神医天真」を冠した稿本は、まず1969年に京大本『神医天真論』が、次いで2001年に内藤くすり博物館本『良中子神医天真』が、そして2011年末に早稲田大学本『良中子神医天真』の発見によって三冊が知られるようになった。これらを通じて明確になった事が幾つかある。

① 早稲田大学本の「目録」部分には「自然活眞自感妙感気論 下」という表題があるので、同じ表題で上巻があったと推測できる。そしてこれら両巻が稿本『自然真営道』の71-72巻（「妙感気論巻上下」）に対応しているとみられること。

② 早稲田大学本と京大本の筆跡は酷似しており、かつ写作にあたって、一頁の字数を1行あたり15字で7行と決めて整然と書かれており（＝書式の共通性）、同一人物が写作した可能性が強い。

- ③ 内藤本は一冊ながら、早稲田本・京大本を基準にすれば二冊分の分量があり、しかも内容的には前半が主に天地論、後半が病理論なので稿本『自然眞営道』の60－61巻（「転定病論巻 上下」）に対応しているとみられること。（同時に「大序」巻の記述と重なる部分が多い事はすでに指摘されている。）
- ④ 発見された三巻の内容は昌益の医学論の諸方面について重複なしに記述されているが、薬物処方についての具体的記述はない事も共通している。

これらの事項から、『神医天真』諸巻は稿本『自然眞営道』の医学論諸巻に対応して、薬方抜きに重複無く全般的に記述された内容とみてよさそうだ。ただし両者の先後関係＝どちらが先に書かれたかは、不明である。ともかくこうして、昌益には『神医天真』諸巻があったということになる。

（3）「転定病論巻」二巻と「大序」巻の関係

内藤くすり博本『良中子神医天真』が発見された当初は、その内容が専ら稿本『自然眞営道』の「大序」巻と共通している部分が多い事から、専ら両巻の内容の比較や先後関係が議論的になった。筆者もまた然りであった。しかしその後、早稲田本『良中子神医天真』が発見されたことで、（前項でも触れたように）昌益には「神医天真（真）」と題した何冊もの諸巻があり、昌益医学の各方面を広く、それも重複無く扱っているらしい事が分かってきた。

この結果、先に述べた通り筆者は内藤くすり博本は稿本『自然眞営道』の第60－61巻＝「転定病論巻 上下」に対応すると見られること、それが同時に「大序」巻ともかなりの部分共通している、というように見直しようと論を進めるようになった。

さらに「大序」巻には天地論・病論のほか文字文化批判論があるので、この部分は稿本『自然眞営道』の医学論以外の巻からの抜粋と見られること（具体的には稿本『自然眞営道』の第16-23巻の真者と伝統諸家の問答巻）も同時に指摘したい。つまり、「大序」巻は天地論・医学論以外の部分からの抜粋も含んでいるが故に“大序”巻なのだと言えよう。

§5 実に多忙だったと思われる晩年

（1）以上のように、晩期昌益の活動課題を五項目にわたって整理してみると、改めて昌益の日常が多忙極まりない日々だったと推察される。生涯を通じて郷里に定住した同時代の哲学者・医家だった九州の三浦梅園の晩年と比べると、あまりにも多くの課題を抱えた、慌しい生き方を続けたように見受けられる。それは単に取り組み課題が多くて体力を消耗するというに限らず、寺社勢力との精神的軋轢や村落自治の構築と医師としての治療活動、眞営道理論の著作集成に向けた細かい作業など、心身両面にわたっての重い負担となっていたのであろう。昌益の最後が家族と離れた单身帰郷の果ての病死だったのは実に痛ましい。

（2）大館での日常活動には目前の諸事に加えて、八戸に残した家族との通信、そして八戸その他各地にいる弟子たちとの交信、とりわけ神山仙確との著作集成上の連絡など、書面によるやり取りの手間が想定されるが、現在のところこのような書信史料の発掘が聞かれないうように思われるのだが、筆者の無知の故であろうか。

（3）筆者はこれまでも既に、晩期に入った昌益が一連の著作を集成する上で、中年までの大言壮語的な部分を幾分収束的に抑制したのではないかと論じてきた。例えば、初期の稿本『私制韻鏡巻』などでは詩文構成法に関して、五行論に基づく詩文論を拡散的にくどくどと展開していたのが、最晩期には「文は吟制する者に非ず。只意を採る者なり。此の故に予が眞営道の書は、文を費^{かさ}らず、眞営の道を採

るのみ。」(『大序』巻)と、明らかに論調が変わって、収束的になっている。

昌益は晩期に到って理論展開の面からも、著作の集成上からも収束的取りまとめを意識しだしたと思われるのである。

終りに—実践諸課題と著作編制の間—

(1) 筆者はこれまで、安藤昌益の伝記的研究の方面については殆ど関心を寄せずに過ごしてきた。しかし自らが人生の晩期を迎える事で、初めて昌益の晩年への追体験的アクセスが可能になったという実感に基づき、これまでの昌益思想研究中心の進め方に、僅かに晩年の昌益の生き方・生き様についての探求も加える必要性を感じるようになった次第である。昌益の思想深化の過程を、時代背景・社会環境や読書基盤との関係だけで探究するのではなく、昌益自身の人としての営みの過程との相関に於いて見ていかなければならない属人的側面も考慮したい。

(2) 加えて筆者は、(昌益思想研究とは別個の事ながら) 自己の出身地の近世農村史を探究したことで、昌益の帰郷後の活動についても農村社会環境を理解しやすくなった事から、この小論で晩期の昌益について改めて捉え直してみる必要性を感じた。筆者の出身地・越後と昌益の郷土・秋田では、当時に於いてももち論地域的差異はある。しかし同時に農村社会に共通した事態も又見いだせる事を、これまでに恩田守雄氏の労作『互助社会論』(2006) などから学び取ってきた。

(3) 更に加えて、自らが関与した早稲田大学本『良中子神醫天真』の発見・解読によって、『神医天真』諸巻に対する考察が一步進んだ事から、晩期の昌益における諸活動と著作集成との関わりについても、合わせて考察を深める必要性を感じて、このような小論を半ばメモ形式で残しておくに到った。

解明・探究しなければならない事項は、昌益の晩期に限っても山積していると、改めて感じている。

〈引用・参照文献〉

- 1) 筆者：安藤昌益の活真道論(人生訓)—「人相巻」中身論の記述を中心に—；『互生共環』No.39 (2013) 10-17
- 2) 石渡博明：『いのちの思想家 安藤昌益』(2012) 昌益一門の全国集会；70-72；自然食通信社
- 3) 萱沼紀子：『安藤昌益の学問と信仰』(1996)第二章 安藤昌益の顔；89-147；勉誠社
- 4) 安永寿延・山田福男：『増補写真集 人間安藤昌益』(1992)わが子に背かれた昌益；105-107；農文協

近世日本の多世界宇宙・地球外生物論

始めに——天外天・天外生命への関心

一時代前には宇宙天体論の近世思想史と言え、宇宙が有限か無限かという議論と、地動説の受容を巡る議論に関心が集中していた。もちろんこの論点は現在も引き継がれて、様々な論考が続出している。しかしここでは、宇宙無限論とも関連はあるが多世界宇宙論の思想と、その中での地球外天体における生命・生物の存在可能性を巡る思想に着目して新たに稿を立てたい。

多世界宇宙論と地球外生命体論は、現代科学の側からの問題意識でもある。20世紀末期からの量子宇宙論の展開で、宇宙は universe = 「一つの最大」 = 単宇宙に限られず、多宇宙 = “multiverse” の概念が生まれた。その傍らで生命の起源に関しても地球外生命の探索が進み、銀河系内の恒星に地球と同様の水や大気を持った惑星の発見が相次いでいる。

こうした現代の時代背景を持ちながら、近世日本の科学思想史においても、多世界宇宙論・地球外生命論の系譜に属する思想を探索することは有意義なことであり、かつ昌益の自然思想・天体思想の比較思想論的定位にも役立つと思われる。近世前期までは多世界宇宙論に関する有意な見解を披瀝した思想家は見当たらないので、本稿では中期からの安藤昌益(1703-1762)・司馬江漢(1738-1818)・志筑忠雄(1760-1806)・山片蟠桃(1748-1821)・高橋至時(1764-1804)・吉雄常三(1787-1843)の六名について、辿る事にしたい。多世界宇宙論者ではないが無限宇宙論者である三浦梅園(1723-1789)については末尾で簡潔に触れておきたい。近世中期までの宋学・南蛮学から始めて後期から末期にかけての蘭学・洋学の到来に伴う多世界宇宙観の拡大的変容を見て、その中での昌益の転定思想の定位を図りたい。

§ 1 安藤昌益の転殻論と転定外転定人論

(1) 転殻の設定——全一性と運動恒存性

安藤昌益の天地観は、第二次渾天説 = 大気中に浮かんだ球体としての地球、の進退論的改作(球体から変型した卵形状)であり、また南蛮系天文学の天界知識を取り入れたものであった。地球の形状も、天殻の形状も、ともに球形から変型した卵形で、両者は進気と退気の配位が逆になっていると主張した。

昌益が地球を中心とした「八層転」の外側に「転殻」があるとして、渾天説の外殻観念を引き継いだのは、「転気」の「空散」による運動の恒存性の破壊を防ぐ役割を設定しているからに他ならない。

「転は果して限る所非ずと云へること、又失りなり。若し限る所無き則は、転気空散して、転体何を以てか立つべけん、人・物何を以てか立つべけんや。」 (刊・巻二)

こうして空間的には有界領域を設定する事で運動の恒存性を主張する一方で、時間的には天界の運動は「無始無終」の継続性を保つとする。

「転定は活真の全体にして、無始無終なり。」 (稿・真道哲論巻)

(2) 天地外天地の設問——禽獣巻での提起

昌益は中期の著作『統道真伝 禽獣巻』において「転定の外、また有り無しの論 自然の妙論」という項目で、人の住む「此の転定」の外にまた別の「転定」があるかどうかについて、設問と回答を与えている。まず、設問の方を見ていこう。

「此の転定の外に別の転定有りて、人倫・万物有りて、此の転定に異ならざるか。亦別の転定にして別物有るか。亦此の転定の外は如何なる有様なるや。亦此の転定の外は必至と無きか。亦此の転定と為る五行・自然には何物が成りたるや。自然を論じて之れを知らず。汝之れを知るや。」

(統・禽獣巻)

ここに提起された課題は、

- ⑤この天地の外に別の天地人物があって、この天地と同じのか違うのか、
- ⑥この天地の外はどのような姿をしているのか、
- ⑦この天地の外には本当に何も無いのか、
- ⑧この天地の五行に相当する物は何から成り立っているのか、

天地の自然を論じていながら、実はこれらの事が分かっていないと昌益は世間一般の疑問を整理して提起している。つまりは天地外天地の有無、有る場合にはその姿態と実質はどのようなものか、と論点を集約している。

(3) 昌益の転定外転定人論——設問への回答

これらの問いかけに対する、昌益なりの回答が前述の引用に続いて、論理的に述べられている。

「吾が外に有りて人有りとなれば吾なり。人無しとなれば吾なり。吾が外の人も人なり。吾も人なり。人は転定なれば、此の転定の外に有りとなれば又転定なり。無しとなれば又転定なり。故に有りとなれば、無しとなれば吾が儘にして自由なり。(中略) 故に此の転定の外の有様も、また此の転定なり。故に此の外、無しとなれば此の転定のみ。故に『ア・ナ』は同音、『リ・シ』も同音にして、有・無にして一つなり。」
(統・禽獣卷・同前)

ここでは四つの事項が関連付けて論じられている。

- ① 一人と万人の関係：自分の周りの万人もまた同じ人間である。
- ② 人は小天地である：天地の外に天地があっても、一人と万人の関係と同じく、同じ天地がある。
- ③ 従って此の天地が分かれば、外に未知の世界はなく、有り無しの問いかけはどちらでも自由だ。
- ④ 「アリ」「ナシ」の呼称自体も音韻論としては同音で、一つの存在である。

最後の音韻論は天地外天地論についての科学思想上は不要だが、一人と万人の生物的等質性を、「此の天地」と天地外天地の関係に対応付けて、論断を下したわけである。これで、天地外天地に対する不可知論・神秘的観点は一掃された事になるが、既知の世界と論理だけで結論を下す行き方には、科学的認識の展開という見地からは無理も生じていると言えよう。

(4) 昌益は“弱い無限宇宙論”者と捉える事も可能

天地外天地についての昌益の結論は、有るか無いかと二者択一的に捉えず、「有無にして一」だと捉えよ、というものであった。

「転定の外・吾が外、有りても転定と人なり。無しとしても此の転定と人なれば、有無にして一つなるを、有りや無しやと論ずるは吾れを知らざる迷ひなり。自然・五行には何が成りたると云へること、・・・(中略) 自ら然りて自ら成るなり。(中略) 故に自然は始め無く終り無き自然、此の五行なり。」
(統・禽獣卷・同前)

「此の転定」はすべて「五行」からなる「自然」の「自成」であり、天地外天地の様相も構成体も同じだ、という等質性の断定による「有無にして一」の論理である。この引用部分では天地外天地の有無を問うのは「吾を知らざる迷ひ」だとして、先に引用した「吾が儘にして自由」という表現とのニュアンスの違いがある。

結論的にあえて言えば、昌益の天地外天地論は、人の住む「此の転定」を単位とした同質な集合体として、“弱い主張の無限宇宙論”としても理解出来ない事も無い。小天地である人と人が集まって集落を構成し、地域社会を構成し、更に国々を構成するアナロジーで行けば、天地外にいくつもの天地があっても、人間の一人と万人の関係と同じ、という観点の天地論になるであろうから。

(5) 稿本『自然真営道』には「転定気行部」六巻もの転定気行論があった

ところで、昌益は「転定気行」論に関して、稿本『自然真営道』全101巻の中で主題的に詳論した諸

巻があった事を思い起こしたい。稿本『自然真営道』の第26巻から31巻までは「小部」区分で「転定気行部」巻と指定され、最初の第26巻は「活真妙道転定気行互性巻」と名付けられているので、「転定気行」を特に「互性」論の観点で総論的に取り扱っていたと見られる。そして第27-31巻が各論的展開となっていたのであろう。

これだけの巻数を割り当てて「転定」の「気行」を論じたのであれば当然、天地の形状や天界の構成などについても、晩期の互性論に基づいて詳論してあったものと推測される。従って、天地外天地人論についても、『統道真伝・禽獣巻』での当該記述を更に詳しく展開した可能性を考慮しておきたい。

要は、先に見てきた『統道真伝・禽獣巻』の当該部分だけで昌益の転定論・転定外転定論が尽くされたとは言えない、という事を今後も念頭に置く必要がある。昌益自筆の当該稿本は、関東大震災で焼失したが、その写本の類いが今後出て来る可能性は無しとは言えない。

§ 2 司馬江漢の無限宇宙論と生物生存論

(1) 司馬江漢(1738-1818)は名は峻、字を君嶽と称した。江漢は号との事である。青年期には狩野派の画家、次いで浮世絵師として活動したが、平賀源内の影響を受けてからは西洋画に関心を向け、更に前野良沢・大槻玄沢に師事して油絵・銅版画に転じた。その一方で西洋の天文学と地理学への関心を強め、天明8年に長崎・平戸への旅行に出かけた。長崎に於いて海外航路を渡ってきた唐船・和蘭船を実見し、オランダ人との対話を通じて地球図・天球図・西洋天文学への関心を深めていった。この後、『銅版輿地全図・同略説』『銅版地球全図・同略説』『銅版天球図・和蘭天説』『刻白爾天文図解』『地転儀略図解』などの重要な著作を次々と出していった。

『和蘭天説』は寛政8年(1796)の作と言われるが寛政7年説もある。いずれにせよ18世紀末期の日本における、蘭学の知識を取り入れた重要な科学思想史的達成と云えよう。ただし沼田次郎氏によれば、司馬江漢は『和蘭天説』を著した時点では、地動説の受容者・紹介者ではあっても、積極的な唱道者ではなかったという。

『和蘭天説』の後で刊行された『刻白爾天文図解』(1808)の凡例では、この書の全説が西洋由来の内容であり、長崎の訳司・本木氏が先行して翻訳したと述べている事から、本木良永の訳書『太陽窮理了解新制天地二球用法記』を参照したと見られている。沼田氏の見解では、『和蘭天説』の刊行から12年かけて江漢は地動説についての研鑽を積み、『刻白爾天文図解』の刊行に到って、漸く地動説の積極的な理解者となったと見られる。そして文化13年(1816)、70歳で稿本『天地理譚』を著した。長年にわたる自然科学的諸方面への関心に基づき、天体・気象・海洋・地理・動物・草木・鉱物・観測器具などについて自己流の取りまとめを行った。その基本的論理を菅野陽氏は「水火二元論的自然哲学」と呼んでいる。

(2) ともかく司馬江漢はこの『和蘭天説』で地動説＝大陽中心説を受容し、大陽と惑星の関係を「火」と「水」で象徴的に理解している。更に太陽系と同じように無数の恒星天の層がめぐらされていて、展開には際限が無いとする無限宇宙論の立場を採っている。

「太陽は』天中の一物にして、五星(地も一つの星なり)之を^{まじえ}絡るが如し、日論は中心にありて運転し、衆星及び此地大陽を^{かこん}囿^{めぐ}で旋らん。是天の大機^{これ}〈からくり〉は、火〈太陽の火なり〉・水〈衆星月及び地〉の二つのもの也。(中略)恒星天の細微星及び銀漢の如きも、暗き天の^{くうてう}空中、皆星の層々として、天実に限なし。」(和蘭天説)

注目されるのは、太陽系の中で、地球と同じように人が生存できる「造化」作用があるのは金星と月と火星に限られ、土星・木星は太陽から遠すぎて日光の効果が不足するので水球のようになっているとして、生物が生存できないと主張する。

「五星太陽に近しと雖も、水星日に甚だ近し、極て熱をなす、故に人を生ずること可はず。金星と此地及び月・火星は造化の巧をなし、土木の二星必ず人類を為さず、日光の力及ばず、彼二星より日を見ること遙にして微なり、故に水の玉の如し。及層々たる衆星皆水玉にして、僅此二星・月此地の如く造化をなすなり。」
(和蘭天説)

(3) しかしこの著書の「跋」では、総括的にこうした主張を再度述べているが、視界の効かない遙か遠くの天体については人類の存在は知る事ができないとした上で、月と五星は大陽に近いから人類が存在できると記述している。諸惑星における人類生存条件についての論点は、五星を一括的に扱った事で、本文での記述に比べて幾分ラフで後退的な捉え方になっていると言えよう。

「天の極まりなき、あに言の尽す所ならんや。徒だ目の見る所を視るのみ。その見ざる所に至りては、則ち及ぶべからざるに幾し。(中略)周天の諸星は、万々の世界にして、太陽を距りては極めて遠し。意ふに人類の存在は知るべからず。ただ月・五星は大陽に近し。まさに此に同じかるべし。(中略)六合の外、更に別の日輪ありて一宇宙を為す。その日月星辰も、またわが宇宙のごとし。無数の宇宙は、嘗々として野馬の虚に在るがごとし。この前説はみな西域三都の發明する所なり。」
(和蘭天説 跋)

このように、司馬江漢は無限宇宙論と地球外生命論に関しては、既に『和蘭天説』(1796)を著した時点で積極的に論じており、地動説の正確な理解はそれから12年後の『刻白爾天文図解』(1808)においてなされたと言えよう。ともかく江漢は18世紀末の日本において五行論の変容としての水火論を交えつつも、蘭学の受容による地動説の紹介と共に、宇宙無限論と地球外生命論を論じた先駆者である。

§ 3 志筑忠雄の宇宙天体論と生物生存論

(1) 志筑忠雄の略歴：志筑忠雄(1760-1806)は本姓が中野、名は忠次郎だったが通詞職の志筑氏の養子となり安永5年(1776)に養父の跡を継いで稽古通詞となった。しかし早くも翌年には病弱を理由にして辞職し、文化3年(1806)に47才で病死した。早すぎる死だから実際に病弱だったと思われるが、辞職後に中野姓に戻って天文学・オランダ語学の研究に没頭した事から、通詞のような職務よりも基礎的な学術研究に励みたいという志向が強かったために、通詞職を離れたとも推測される。

代表作には『蘭学生前父』『曆象新書』『求力法論』『鎖国論』などがある。『蘭学生前父』は本邦初の日蘭比較文典で、荻生徂徠の主張に沿って、諸学の基本は言葉の正しい認識にあるという立場で和語と蘭語の表現・時制・文法などの違いを論じた。『曆象新書』は英国天文学者のジョン・ケールの『天文学入門』をオランダ人のヨハン・ルロフスが蘭訳したものを原本として志筑により邦訳(意識的編訳)された内容であり、上・中・下の三巻からなる。上篇は1798年、中篇は1800年、下篇は1802年に完成した。『求力法論』は同じくジョン・ケールの原著を『曆象新書』に先立って1784年に訳出されたもので、ニュートン力学の基本概念である粒子・重力・引力といった概念を受容している。

(2) 志筑は最初の近代力学の理解者であり学問の階層性の理解者

志筑は近世日本における、最初のニュートン力学の理解者であった。ニュートンの運動の第一法則・第二法則の理解、万有引力の逆二乗法則、ケプラーの第三法則などをケールの『奇児全書』に依拠しながら理解を進めた。「速力」の訳語に運動量の概念が繰り込まれていたり「動力」が運動の原因とされる、などの点に不十分さを含みながらも、ともかくニュートン力学を体系として受容し、実用自然諸学の基礎にニュートンの力学的基礎があるという基礎-応用の学問的層次構造をも感じ取ったようで、こうした観点は同時代の天文暦法家にはまだ見られない卓越した先駆性と云えよう。——それは同時に、時代の平均的学術水準を超えた、学術研究者としての孤立性という事にもなるのだが。

ただし、漢字文化圏には粒子的世界観が無かったから、志筑は「属子」という訳語に微粒子の概念だ

けで無く月・日・時・分など時間分割の構成単位も含めるなど、物質の構成単位のほかに物量分割の単位のようにも用いるなどの曖昧さも残していたことも確かである。

(3) 恒星系無限宇宙像と諸惑星での万物生存可能性

志筑はまず、『暦象新書 上篇』において、無限に広い宇宙空間の中で太陽系と同様の恒星系が無数に存在し、それらの恒星系の惑星に、地球とまた同じように「人民萬物」が棲息しうること、その「形状容貌」が地球上の生物と同じであるか否かは分からずとも、棲息の可能性は否定できない、と論じている。

「太虚の無邊なる、太陽の無數なる、同じく其の中に在って、何ぞ必ずしも我が太陽のみ緯星の是を繞ること有らん。他の恒星にも、各々五星の如きもの無くてやはあるべき。(中略) 無數の緯星の中に ^{まぢは} 雜り在って、又何ぞ我地球をしも獨り人民萬物の住所とすることあらん。他の緯星の世界及び他の太陽に附属しつらん緯星の世界にも、形状容貌の同異をこそ知らね、如何では絶えて住者なくて止みなん。」
(暦象新書 上篇・諸曜一轉)

この観点は引き続いて、同『暦象新書 上篇』の付録として書かれた「天體論」においても、改めて述べられている。

「西人の言に曰く、恒星と太陽とは同種なれば、恒星にも各々侍星ありて、我が太陽に五星あるが如くならん。然るに其の侍星又地球と同種なれば、宜しく皆國あり人あり萬物あるべし。然れば世界は宇内に粟散して、其の數無量なるものなりと云へり。此の言真偽如何ん。曰く、我輩未だ天上に遊歴しつることなけれ、如何で其の世界の有無を知るべき。なれども竊かに思ふに、物理窮りなければさることもありなん。」
(暦象新書 上篇附録・天體論)

『暦象新書 上篇』は1798年に完稿したから、司馬江漢の『和蘭天説』刊行の2年後にあたる。上記の引用では『和蘭天説』での記述と比べて、太陽系以外の恒星系惑星での生物生存の条件＝水・火の適正性が特に指摘されていない分だけ、大雑把になっている。しかしこうして、司馬江漢・志筑忠雄による恒星系無限宇宙論と地球外生物論が、安藤昌益から半世紀後には早くも、蘭学を受容によって明瞭に述べられている事に留意したい。

(4) 蘭学宇宙論と伝統的仏学・南蛮学宇宙論の相違の指摘

志筑はこうした多世界無限宇宙・地球外生物の存在可能性の推測が、古来からの単なる憶測とは違って地動説を初めとする天体観測・天体認識の探究の蓄積に基づいて展開されるようになった科学的意義をも強調している。

「古人は先務を急にして、知を萬物に周くすることを欲せず、無為にして萬理の至要に達す。然れども今は數千年來の知を積みて、窮理推測共に漸く精密なるに至りたれば、實理を推して是等の事を論ずるに至るも、固より時勢の自然なるべければ、地動及び衆世界あるの理を説けるも、從來幻妄無據にして徒に人を惑はすもの類とは、大いに異なるべし。」
(暦象新書 上篇附録・天體論)

このように、蘭学の近代宇宙観がもはや単なる思弁では無く、観測と数理と力学により組み立てられるようになった事を踏まえての成果である事を理解したことで、志筑は伝統的な仏教天文観や南蛮学の天文観から明確に決別していると云えよう。

(5) 陰陽唯気論による天体生成論の自然哲学的記述

志筑は更に、1802年に『暦象新書 下篇』を刊行し、その末尾で「混沌分判圖説」を掲げた。これが明治の碩学・狩野亨吉によって高く評価され、論稿「志筑忠雄の星気説」において近世日本の優れた科学思想家として世間に紹介されることとなった。その概略は次のようなものである：

①混沌未分の時、天空は太虚のみで光気が常に往来していた。

- ②その中で「微妙不測の神靈」が作用して太虚に濃淡ができ、内側に回転運動が起きた。
- ③内側に求心力が効いて集積が進み、「外天」と「中天」の分化が始まり、「第一天」が形成された。
- ④第一天の内部に、また回転運動が起きて「第二天」が形成され、次々と第三天以下も形成された。
- ⑤このような全団の外にあった小塊が遅れて到来すると楕円軌道の別天体も形成される。
- ⑥以上は「気質聚散の大理」を言っただけで、天地の起源には触れていないが後世に明らかになる。こうして自然哲学的ながら、「混沌」の太虚から次々と諸天体が力学的に形成されたと論じた点が、ニュートン力学と陰陽唯気論の融合・折衷による、志筑の天体形成論である。
- カントの宇宙・天体進化論に比べると、ずっと思弁的ではあるが、それでも近世後期の日本における、重要な科学思想史的意義があると言えよう。

§ 4 山片蟠桃の宇宙天体論と生命環境論

(1) 蟠桃の略伝：山片蟠桃(1748-1821)は職業学者ではなく、本業は大阪の米屋で、かつ大名相手の融資によって栄えた升屋・山片家の大番頭であった。播磨国の在郷商人の次男に生まれたが、13歳の時に伯父の養子になり、升屋に奉公した。本名は長谷川有躬ゆうきゆうで蟠桃は文号である。17歳で元服し四代目久兵衛となり、斜陽化していた主家升屋の番頭として経営手腕を発揮して経営再興を遂げ、寛政年間には仙台藩・豊後国岡藩などの財政再建に協力した。58歳で山片芳秀と改名したが、このころから眼病を患い、晩年には失明状態となり、不運な一面もあった。

番頭職の傍らで学問に励み、懐徳堂に入門して中井竹山・履軒兄弟から儒学を学ぶと共に蘭学への関心を深め、更に当代第一の民間天文学者・麻田剛立に師事して研鑽を積んだ。享和2年(1802)頃から大著『夢の代』しよの執筆を始め、失明状態にもめげず死の半年前＝文政3年(1820)8月まで書き続けた。儒学の精神に基づいて幽霊を否定した無鬼論を展開する一方で蘭学伝来の地動説を積極的に受け入れた。合理主義思想家として評価が定まったと言えよう。

『夢の代』は天文地理論から始めて政治経済論、靈魂不在論、医学処方論など広範囲に及ぶ内容である。天文学の記述分野では志筑忠雄の『曆象新書』をかなり長く引用すると共に自説も積極的に展開し、壮大な宇宙論を提唱するところとなった。志筑忠雄の著書を熟読したことで、地動説はもちろん、重力・引力の概念も理解し、自らの宇宙論の構築に大きな基礎を築いた。また実験観測の学問が時代と共に進歩する事を直視し、試案の立春元日曆をも作成するなど、曆学の革新にも意欲的であった。

以下では蟠桃の宇宙天体論・地球外生命論に絞って取り纏めたい。

(2) 各恒星系の明界と恒星系間の暗界

蟠桃は太陽が恒星の一つであり、恒星の光が及ぶ範囲＝「明界」と及ばない範囲＝「暗界」を設定して、宇宙空間が無数の明暗二界から出来上がっていると見なした。暗界があるが故に、恒星と恒星の距離は一見近いように見えても、実際は遥かに遠くにあると主張する。また各恒星には大小があり、それによって各恒星ごとに惑星数の多・少も起こるとした。

「ここに客ありて、余が画する処の明暗界、及び恒星の図を難じて曰、(中略) 恒星すべて太陽のごとくなる時は、一星々々の間、光明の及ぶ処は即明界にして、其の一明界の中に、各自七曜のごときものあり。その太陽の大小により、諸曜の多少あるべし。我が居る処の太陽の明界も其の一なり。その明界と明界との間は即暗界なり。今地球より望むときは、恒星地球を去る事遙遠にして、恒星の間は尤近狭に見ゆれども、恒星と恒星との間も亦懸隔にして、即地球より恒星をのぞむにことならず。(中略) この説も亦其理あり。」
いわく すなわち またけんかく

この引用部分は正確には(冒頭にあるように)、客人が蟠桃に語った事項であり、その説にも道理があるという蟠桃の同意内容であるが、おそらくは自説そのものを他人が話して聞かせたように書く事で、

周囲の人に与える唐突な印象を和らげようと狙ったものと推測する。自説が余りにも常人の考え及ばない、時代に先んじた内容であることを、蟠桃は十分認識していたのであろう。

(3) 無数の恒星系と其の多様性、引力

恒星系は無数にあると立論しているのだから、蟠桃もまた無限宇宙論者である。志筑忠雄の『暦象新書』の上篇と中篇を精読し引用しながらの記述で、蟠桃は万有引力による恒星系の運動を理解している。

「太極の中、太陽のごときもの幾百万と云ことをしるべからず。我見る太陽のみ諸太陽と懸隔するにあらず。同じく其の中に排列するなるべし。(中略)引力の説によれば、すべて一明界にある諸曜、其の太陽を心として、其の太陽を繞ること、これ引力によるなり。太陽明界中の諸曜は、みな太陽に引付られて離るゝことあたはず。また自力を以て引付られもせずして、唯ものめぐること、地の月、木・土星の月みな同じ。」
(「夢の代」天文第一)

蟠桃は志筑の『暦象新書』の下篇は閲覧していないので、「混沌分判圖説」は見えていないようである。有坂隆道氏の推定に依れば、蟠桃がこの『夢の代 天文第一』を完稿したのは文化初年(1804)頃だといふ。そうすると、『和蘭天説』→『暦象新書』→『夢の代 天文第一』の期間はまさに18世紀末から19世紀初頭の日本における、宇宙天体観の激変期と云えそうである。

(4) 各恒星系での地球外生物の生存条件

蟠桃は志筑忠雄の『暦象新書』も参照して、その天体生成論・無限宇宙論・地球外生物論を継承すると共に、自らの考察も加えて論述を進めた。地球外生物の存在可能性についても、次のように述べている。

「凡^{およそ}この地球に人民・草木あるを以て推すときは、他の諸曜といへども、大抵大小我地球に似たものなれば、みな土にして湿気なるべし。(中略)太陽の光明を受けて和合せざることなかるべきや。すでに和合すれば水火行はれて、草木の生ぜざることなし。又虫^{もと}は本より生ずべし。虫あれば魚貝・禽獣なきことあたはず。しからば何ぞ人民なからん。」
(「夢の代」天文第一)

この引用文で注目されるのは、志筑忠雄の観点よりも一層具体的に生物の存立条件として、惑星に適度の土と水(湿気)が有る事、それに太陽光が作用して「和合すれば水火行はれて」草木が生育すると論じている点である。素朴ながら地球以外の惑星にまで範囲を拡げて、唯物論的に生物の発生・成育条件を考察しているわけである。蟠桃は単に蘭学天体論の新しい知識を受容・切り売りするに留まらず、自らの思考で惑星における生物の存立条件を論じている。

§ 5 高橋至時の多世界恒星系無限宇宙論

(1) 高橋至時(1764-1804)は大阪町奉行所の定番同心の家に生まれ、家業を継ぐ傍らで宅間流の数学を学び、さらに麻田剛立に師事して天文暦学を修めた。剛立の推挙で幕府の寛政改暦事業に抜擢され、僚友の間重富と共に寛政7年、江戸の暦局に入り、天文方に任ぜられた。翌年から京都で改暦作業に従事し、終了後は江戸に戻って亡くなるまでの5年間、さらに進んだ天文学研究に努めた。寛政暦では太陽と月だけに楕円運動論を導入したが、これを諸惑星にまで適用するための努力を続けた。寛政12年(1800)に楕円軌道論による惑星位置計算法を論じた『新修五星法』の執筆を開始し、翌年に初稿を、享和3年(1803)には第二稿を完成させ、その半年後に41歳で他界した。

『新修五星法』の功績は、太陽中心のコペルニクス体系をチコ・ブラーへの地球中心体系に座標変換して諸天の運行を解析する道筋を建てた事と云えよう。しかし高橋は単なる天文暦学者ではなかった。この点について、嘉数次人氏は次のように述べている。

「高橋はなぜ、地動説を懸命に擁護したのでしょうか。それは彼が天動説と地動説の問題を単に天体軌道の座標変換問題として捉えていただけでなく、宇宙観の問題としても考えていたからだ

と考えられます。つまり、『西洋新法曆書』や『曆象考成』といった漢訳西洋書が論じている天体の配列順序や日周運動、歳差、公転運動などの見解をワンセットの宇宙観として理解したが故に、新しく入ってきた地動説も同様のものとして考え、様々な間接的理由を挙げて地動説に賛成した」
(江戸幕府の天文学 (その6) ; 2008)

高橋は暦学家であるだけでなく理論天文学者であり、地動説を宇宙論的観点と軌道論の視点で統一的に把握しようとした点で、師の麻田剛立の天文暦学をさらに拡張展開できた人物とも言えよう。

(2) 国立天文台所蔵の高橋の著書『増修消長法』寛政 10 年 (1798) には「贈麻田翁」と題された一文が挟まれていて、高橋の宇宙論的見解が披瀝されているという。

「此間下総守殿より借用之蘭書中之図に、左之如きもの相見へ申し候。此西瓜を積重ね候如きものは恒星一星々々各其天心に居し、不動の体を写し出し候事と相見申候。」 (贈麻田翁)

「天体は今見候太陽天之如きものを数十万積重ねたるものに相成候間、さてさて廣大無辺成事に御座候。浮屠氏の三十三天はものかわに御座候。天道の無窮、言語を絶し候義、併かくこそ有るべきに存じ奉り候。」 (同上)

この引用文で「左之如きもの」という図は、太陽系のような恒星系を昭光圈と暗黒圏からなると思われる同心円で示し、それを立体的に無数に集積した一部を示したものである。暗黒圏の外周までを一恒星系の引力圏として、その中に昭光圈を示しているのは、万有引力やケプラーの法則を理解した至時の立体的天体観と云えようか。その恒星系の無数の集積を至時は「西瓜を積重ね候如きもの」と表現した。このように高橋至時の場合は、太陽系を典型とする恒星系の無数の集合体としての無限宇宙像が描かれているが、それぞれの恒星系に於いて生命体の宿る惑星も存在しうる可能性には特に言及していない。恒星系無限宇宙観は明示されているが、至時は地球外生物については、特に関心を持たなかったようである。

至時が描いたこの図の原図と考えられるものとして、国立天文台の UPL 公開展示での解説によれば、英国の天文学者 T. WRITE 著『An ORIGINAL THEORY or NEW HYPOTHESIS of the UNIVERS』(1750) に類似の図がある事を示し、それを参考に書かれた蘭書を基にして至時の図が作られたのではないかと示唆している。至時は『ラランデ曆書』の名で知られた、フランス天文学者 J. J. Lalande の著書のオランダ語訳本 (1773-1780) から近代天文学の歴史的発展について重要な知見を得た。広瀬秀雄氏は「至時はこのような、うってつけの名著にめぐりあい、これによってわが国での真の洋学として近代天文学建設の基礎を置いた。」と指摘している。

(3) 理論天文学者・至時の果たした役割：

高橋至時は享和 3 年 (1803) に幕府天文方の上司としての若年寄・堀田正敦から『ラランデ天文書』5 冊を見せられた。ラランデはフランスの著名な天文学者でパリ天文台長も務めた人物である。この書の重要性を感じ取った至時は正式に入手したいと願い出て、受け入れられるところとなった。約半年かけて重要部分を解説し『ラランデ曆書管見』と題した解説書 11 冊に纏め上げた。この解説作業の無理がたたって、至時は 41 才の若さで病死した。訳し残した部分は間重富 (『ラランデ曆書訳述』) と至時の次男・景佑^{かげすけ}が引き継いだ (『ラランデ曆書訳草』)。至時はこのラランデの書の訳業を通じて、地球が単に球体というに止まらず、より正確には楕円体である事を知った。

こうして西洋天文学に通じた高橋至時の訳業が基礎になって、日本で最後の太陰太陽暦「天保暦」の暦法が作られていったので、至時の果たした役割は暦法改革と宇宙天体論の実用・理論・思想の各方面で、大きなものがあったと言えよう。なお全国各地の測量を行い、精密な日本地図を創り上げた伊能忠敬も高橋至時の弟子であった事も付記しておかねばなるまい。

§ 6 吉雄常三の多世界恒星系無限宇宙論

(1) 吉雄常三(1787-1843)は俊蔵・常庵とも称し、諱を尚貞、字を伯元、号を南臯とした。父は吉雄定之助で、定之助は吉雄耕牛(1724-1800)の次男であった。吉雄家は代々、オランダ通詞職の家系であり、耕牛は特に名通詞として50年間にわたって、「年番大通詞職」にあったという。寛政2年(1790)通詞目付となったが、輸出樟脳と輸入銀貨に関する処置不行き届きの理由で咎めを受け入獄後、蟄居を命ぜられたという。常三はこうした家系に生まれたが、5歳の時に父の定之助が長崎追放となり18歳の時に赦免となった。しかし常三はこの父の不在中に、何人かに師事してオランダ語学習に励み、文化11年(1814)に長崎を出て、羽栗洋斎の仮名で大阪・江戸・名古屋を遍歴した。大阪滞在中に志筑忠雄の文法書に準拠した新文法書『六格前篇』を著してオランダ語教授活動を行った。文化13年に名古屋の蘭学者・小川廉次と漢方医・浅井貞庵の知遇を得て同地で教育・著訳・医療活動に従事するうちに尾張藩に召し抱えられた。医師としての務めと共にオランダ語、『暦象新書』『解体新書』、運氣論の講義を担当した。この間に医学・天文学・薬理学・化学・植物学・火薬学など広範囲にわたる研究を進めると共に、多くの著作を出した。天文書『遠西観象図説 附地動或問』全3巻は文政6年(1823)に刊行されたが、出版準備はその2年前にほぼ完了していたという。

常三は天保14年9月に実験研究中の爆発事故でガラス瓶の破片を受けて手の動脈を切り、絶命した。

(2) 太虚(空間)の無限性と屈伸性

吉雄は宇宙空間の無限性とその物質の屈伸性を述べ、屈伸は場所によって違いがあり一様ではないこと、そのことから剛柔・疎密・寒熱の差異が生じていき、「土」の部分と「火」の部分形成され、前者が惑星に、後者が恒星となって太陽系のような恒星系が無数に作られると論じている。志筑忠雄の「混沌分判図説」とほぼ同様の論述といえよう。

「凡そ、仰いで視る所、蒼茫として限量(カギリ)なき、これを太虚と云ふ。空闊(トリシメナク)にして方体重(カタチ)なく、清澄(キヨラカ)にして至虚(ウツロ)なるが如しと雖ども、靈妙神氣充実し、屈伸変化休むことなし。(中略)其屈伸夾雜(しん)不同にして、剛柔(ひと)齊しからず、疎密一ならず。寒熱性を異にし、群類以て分る。其光明炎熱なる、これを火と云ひ、鈍体遅重なる、これを土と云ふ。百・千・万・億、無数の大火球ありて、幽暗至薄の伸気中に散満し、各其所在の近傍、数億万里の内を照らす。」(遠西観象図説 卷中)

上記の引例での「靈妙神氣」は特に神秘性を強調したわけではなく、伝統的な陰陽二気の能動性を意味していると言ってよかろう。吉雄は実験精神の旺盛な科学者というべき人物だったからである。

(3) 太陽系の五星に生物が生育するという主張

注意を引くのは、太陽系の五星に地球と同様に人畜・草木が生存していると論じている点で、山片蟠桃の、生命生存条件を満たす惑星にのみ、生命が宿るとする考察よりも後退している。と云うよりは、吉雄は種本のオランダ自然科学書の知識をよく検討・吟味することなく受け継いだだけ、といった方が適切かも知れない。

「水星、金星、火星、木星、土星、これを五星と云ふ。(中略)皆なこれ球体にして、自己の光なく、一種の世界にして草木生じ、人畜住すること、吾地球と異なることなし。」

(遠西観象図説 卷下)

こうした見解は太陽系外にも拡張され、恒星天と、その中で生命体の認識として展開されている。今日のように宇宙観測の科学と技術が進展していなかった当時であっては、かえって素朴で楽天的に地球外生物の存在が主張できたことになろうか。

「恒星は其数無量にして游星天の外に散在し、静居して其位置を改めず。故にこれを恒星と云ひ其繋る所の天を恒星天と云ふ。其質は火にして能く光輝を放ち、其体至大なること全く太陽と異なるこ

となし。(中略) 其恒星を太陽としてこれを旋回し、其游星は各一世界にして人畜住し、草木生ずること、吾地球に異なることなく、又其游星に或は小游星ありてこれを旋回すること、吾地球に太陽あり、土・木・金の三星に小游星あるが如くならん。」(遠西観象図説 巻下)

(4) 『遠西観象図説』の全般的内容をどう評価するか

以上、ここでは吉雄常三の恒星系無限宇宙論・地球外生物論を限定的に取り上げたが、『遠西観象図説』では上巻で「天象圖」を統合的に掲げた。天動説の天象図・地動説の天象図・太陽黒点図・満月の表面図・土星図・木星図・地球大陸図その他を図示して解説している。中巻では太陽系と月の運動、太陽暦について解説し、下巻では太陽系の五星、恒星、尾星(=彗星)を扱い、末尾の付録「地動或問」で地動説を問答形式で解説した。こうした内容について、広瀬秀雄氏は次のように全般的評価を下した。

「『遠西観象図説』は当時の西洋天文学の姿を描こうとしたもので、しかも理学研究の基礎との考えのもとに天文学を取り扱った最初の概説書として、非常に重要な地位を占めていると考えなければならない。運氣論はもちろん、気象とも訣別し、完全に近代的な洋学天文書となっている。」

(吉雄南臯と「遠西観象図説」)

筆者も大筋としてはこの評価に従う者であるが、常三は西洋天文学を体系的に取り入れることで伝統的唯気論・運氣論を背景思想に引き下げ、主客を交代させたと言った方が、より適切ではないかと考える。「太虚」など、志筑忠雄の「混沌分判図説」を継承した素面もあるからである。

終わりに—近世天体思想史の中の昌益—

以上、近世日本の中期から後期にかけて多世界宇宙論あるいは無限宇宙論と地球外生物論の観点をもった思想系譜に関して、6人の思想家について概観してきた。それぞれの思想家についての個別的議論としては極めて荒っぽく、最小限度の扱いしかしていないので、論稿としてはまだ極めて不十分だと自覚している。特に志筑忠雄と山片蟠桃の宇宙天体論については、先行研究の豊富な蓄積があるが、ここではそのごく一部しか扱わなかった事をお断りしておく。

(1) 江戸後期の蘭学系学者・思想家たちの、このような系譜的展開の中での前座として、昌益の天地論・天地外天地人論を比較思想的・史的に捉えることで、新たな知見が加えられたと思われる。

結論的に言って、昌益の天体思想の積極面は天帝思想の一扫(転真・中央論)、運動の恒存性の主張(無始無終論)、神秘論・不可知論の否定(転人対応・同質論)などがあげられる一方で消極面として人体=小天体の観点からの擬人的制約、天殻観念にとらわれた点、観測を無視した九重天の数値構成の恣意的改変などが挙げられる。これらの諸点については拙著『互性循環世界像の成立』(2011)で論じたので、ここでは指摘だけに留め置く。

蘭学系天文学に遭遇する前の、南蛮宇宙観の改変の範囲での、合理的天地像の模索に留まったのが昌益の時代的限界だったと言えよう。しかし天地外天地人論の立論自体は有意だったし、その詳しい内容が稿本『自然真営道』の第26-31巻の中で更に展開されていた可能性も考慮しておきたい。そして昌益没後、半世紀と経たないうちに、本稿で論じたような蘭学系の新たな宇宙天体観・地球外生物論が展開された事になる。昌益だけで無く、これに寄与した科学者・思想家たちの積極性にも敬意を表したい。昌益は強いオランダ志向を持っていたが、蘭学系の天文知識に接する事はできなかった。

(2) 最後に、本稿では触れなかった三浦梅園の宇宙観について一言。

当初は安藤昌益に続いて三浦梅園も俎上に上げる予定でいたが、本稿では断念した。その理由は、梅園も特徴的な無限宇宙論者ではあるが、多世界宇宙論とはニュアンスを異にし、かつ地球外生物論の言及が特に見られないためである。筆者は梅園の宇宙天体論をさほど探究したわけでは無いが、これまで

の先行研究者（山田慶兒・吉田 忠・尾形純男・高橋正和・五郎丸延・壺井秀生などの諸氏）の所論を見ても多世界宇宙・地球外生物といった範疇でのアクセスが見られない。しかし近世の包括的な宇宙天体思想史を辿る上では、重要人物である事は確かである。梅園の宇宙論・時空論・天体論および関連範疇論については別途、機会を改めて取り扱う事にしたい。

〈引用・参照文献〉

- 1) 長尾伸一：複数世界の思想史（2015）10-19；名古屋大学出版会
- 2) 平岡隆二：南蛮系宇宙論の原典的研究(2013)；花書院
- 3) 渡辺敏夫：近世日本天文学史（上）(2011)；恒星社厚生閣
- 4) 沼田次郎校注、広瀬秀雄注：和蘭天説；日本思想大系 64『洋学 上』(1976) 445-488；岩波書店
- 5) 菅野 陽：司馬江漢著『天理地譚』；有坂隆道編『日本洋学史の研究 VI』(1977) 139-180；創元社
- 6) 広瀬秀雄：洋学としての天文学—その形成と展開—；『洋学 下』(1972) 419-440；岩波書店
- 7) 志筑忠雄：曆象新書 上編・中編・下編；三枝博音編『日本哲學思想全書 第 6 卷 自然篇』(1956)；平凡社
- 8) 有坂隆道：蘭学と日本人の宇宙観；緒方富雄編『蘭学と日本文化』(1971) 95-104；東京大学出版会
- 9) 有坂隆道：山片蟠桃の大宇宙論について；有坂隆道編『日本洋学史の研究 VI』(1977) 181-204；創元社
- 10) 末中哲夫：山片蟠桃の研究「夢の代」篇（1971）；「夢之代」全：511-614；清文堂出版
- 11) 有坂隆道校注、藪内 清・海野一隆・水田紀久注：夢ノ代 天文第一；日本思想大系 43『富永仲基山片蟠桃』(1973) 149-222；岩波書店
- 12) 嘉数次人：江戸時代の天文学[7] 江戸幕府の天文学(その6)；天文教育 Vol.20, No.4(2008) 8-13；天文教育普及研究会
- 13) 国立天文台 貴重書展示 第 31 回：高橋至時；<http://library.nao.ac.jp/open/index.html>
- 14) 吉田 忠：高橋至時と西洋天文学；天文月報 第 98 卷第 5 号(2005) 291-299；日本天文学会
- 15) 中山 茂：天文方の進歩観、科学史観—高橋至時を中心として；天文月報 第 98 卷第 5 号(2005) 380-383；日本天文学会
- 16) 広瀬秀雄校注：理学入式 遠西観象図説；日本思想大系 65『洋学 下』(1972) 53-165；岩波書店
- 17) 広瀬秀雄：吉雄南臯と「遠西観象図説」；日本思想大系 65『洋学 下』(1972) 466-473；岩波書店

なお志筑忠雄については、本誌の No.35(2011 年 12 月)、No.36(2012 年 7 月)でも別な視角から論じた。

本文では引用しなかったが、下記文献も参照した。

堂坂香月：江戸時代の天文学と宇宙論；立教比較文明学会紀要 第 10 号『境界を越えて—比較文明学の現在』(2010) 241-258；立教比較文明学会

吉田 忠：図示された太陽中心説；『洋学』編集委員会編『洋学史研究年報 洋学 11』(2002) 133-153；洋学史学会

任 正懨：『朝鮮科学史における近世 洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的宇宙論』(2011)；思文閣出版

——放談室——

* 平和学者ガルトゥンク氏の尖閣・竹島への言及

毎年9月21日は国連が定めた「国際平和デー」である。本年9月18日の毎日新聞の夕刊に『9条』に頼らず創造的提案を」という表題で、来日した「平和学」の世界的権威・ヨハン・ガルトゥング氏の横浜での講演記事が掲載された。

氏は、地球上に恒久平和を創り出すためには、暴力による他人への支配を無くす事が必要不可欠であり、その暴力支配には武力を背景にした直接的暴力支配と、政治経済・社会制度による貧困抑圧を正当化した構造的暴力支配の二形態が有ると指摘し、その孰れをも否定することで、初めて真の平和がもたらされると主張してきた事でよく知られている。

今回の講演では、日本の安倍政権が推進した安全保障関連法案が実質的に日本国憲法9条に違反するものであり、安倍総理の掲げる「積極的平和主義」の内実が武力による抑止論に他ならないと批判した。この記事で特に注目されるのは、同氏が日本の民衆運動としての平和運動の一環として、竹島や尖閣諸島の問題についてまで、具体的に言及した点である。同記事によれば、「竹島や尖閣諸島など、周辺国との間で和解できていない領土問題については、領土を共同所有し、利益を分け合うという独自の提案をした」とのこと。この提案は、当編集者が以前から提起している事そのものなので（本誌No.42）、大いに意を強くした。人が常住していないこれらの諸島は、当事国が互いに領有権で張り合わず、国際共有地かつ非武装地帯として相互了解しあう事で、21世紀の新たな地域モデルにしうるのではないか。

ヨハン・ガルトゥング氏はまた、日本の他の社会運動についても「研究者や市民は、憲法9条だけに頼るのではなく、平和を築くための多様なアイデアをもっと発信すべきだ」と呼びかけたという。

* 東大駒場・狩野亨吉展の印象記

本年10月17日から12月6日まで、東京大学駒場博物館で秋季特別展として「狩野亨吉展」が催されたので、当編集者も見学に行った。最近2年間ほど駒場には行かなかつたので、近接の駒場図書館での科学史関連の文献調査と併せての訪問であった。膨大な展示物を逐一見てまわって、改めて狩野の多様かつ煌びやかな人脈の中での、波乱に富んだ生き方に感嘆させられた。

今回特に注目したのは、金沢の四高教授時代に担当した天文学と微分方程式論の講義録の展示で、狩野が教育者・蒐集家・鑑定人という側面だけでなく、文理融合型の学者であった事を改めて強く感じた。狩野が志筑忠雄の星気説を発掘したのも、彼の中では必然的な成り行きだったのであろう。

ところで、この展示では各展示史料の読み下しと解説を兼ねた32頁の付属資料が訪問者に提供されたが、出来ればもう一歩進めて、展示品全般を収録した「図録」の類いを製作・分売してもよかったのでは、と感じたのでアンケート用紙にその旨書き込んだ。だが職員の方の説明では、今後はその可能性は無いとの事だった。実に惜しい事である——32頁の解説資料と合わせて「図録」を作れば、長く後世に狩野亨吉資料集として残せると思うのだが。筆者は既に70歳代に入っているのに、このような豪華な狩野亨吉展を見学できるのはこの先二度と無く、最初で最後だと思いながら博物館を退出した。

なお12月2日発行の「教養学部報」No.579の第4面では、岡本拓司教授（関連基礎・哲学）による「駒場図書館へ逃げ！——「狩野亨吉」展が終わってしまう」と題した紹介記事が掲載された。

* 宇宙天気-地表天気-地下天気を知ること

パリで開かれていた地球温暖化対策の国連気候変動枠組み条約・第21回締約国会議（COP21）が12

月 12 日に漸く加盟国の合意に達して「パリ協定」として採択された。今回は温室効果ガスの最大排出国である米国と中国も含めて、全世界が合意した事では確かに前進と云えよう。しかし削減目標達成の義務化は見送られ、努力目標に留まったことで実効性に懸念も出ている。ここではそうした政治的側面に就いての言及をひとまずおき、地球温暖化論の基礎となっている、「CO₂ の人為的排出」が 20 世紀からの地球温暖化の主要な原因だという IPCC 第 5 次報告書(2014)の結論を、参加国が自明の事柄として議論の前提にしている事を再考したい。

本誌のバックナンバーでも触れたように、「CO₂ の人為的排出による地球温暖化」は実はそれほど自明では無く、気球観測や衛星観測からのデータによれば、21 世紀に入ってから十数年間は地球の平均気温は横ばいになっているという指摘もある。物理学者の深井 有氏は著書『地球はもう温暖化していない』(平凡社新書、2015)で此の点を懇切に説明している。こうした観点と共通するか、それに近い見解を持つ科学者は太陽観測の専門家や宇宙線物理学者の一部にも見られ、最近では「宇宙気候学」という新興学問分野も形成されている。当編集者は、地球温暖化論に対しては通常の気候学者の見解だけで無く、こうした宇宙気候学者による、銀河系宇宙線や太陽磁場が地球環境に及ぼす効果も考慮した気候変動論を合わせ聞く事が重要だと主張してきた。

更に 21 世紀前半は気候変動だけで無く、大地震や火山活動など“大地動乱”の時代である事(地震学者・地球科学者の指摘)に加えて、太陽活動も 100 年か 200 年に一度の低調期に入り、その活動低下が地球気温に対して寒冷化効果をもたらす懸念も一方で生まれている事を指摘し、こちらの方をもっと深刻に受け止める科学者たちも一方にいたのである。

こうしてみると、現在の地球環境へのアクセスは温暖化問題だけで無く、「宇宙天気」と「地表天気」＝通常の意味での気象と「地下天気」の三方面から、総合的・全面的・相関的に留意し探究しなければ成らないと云えるのではないか。ここで「宇宙天気」という用語は既に学術用語として広く認知されている。「地下天気」は地震予知研究・広報に取り組んでいる東海大学の長尾正恭教授による造語である。長尾教授は定期的に「地下天気図」を作成して希望者にネット配信されている。

***乱文濫作と饒舌論考は読まれない**

毎日、余りにも多くの情報が洪水のように飛び交っている現代社会では、人々は自ずと自己流の選択原理で、自分に有意な情報だけを取り込もうとしているようだ。それほど交際範囲が広いわけでもない当編集者のもとにも日常的に多くの情報がメールと文書で送られてくる。それらを逐一こまめにフォローする事は無理なので、関心の薄い分野・テーマの記事はフォローせずに終わっている場合が多い。

当編集者から発信しているこの通信に関しても、受信する方々の中には、巻頭言と編集後記しか読まない方もいれば、気が向いた時に限って読む、という方もおられる。他の記事がつまらないのであれば、それでも十分だ。思想・情報の押しつけ・押し売りになったのでは送られた側にとって迷惑千万だろうから。送信した側はこんな場合、決して落胆したりせず、それで元々だと割り切る必要がある。

一方、自分が外部から受け取った情報・文書に対しても、同様の事が起きてくる。余りにも乱文濫作と感じられる通信文が届くと、自分自身でも選択原理が働いて、一部だけサンプリング読み、或いは斜め読みという状況になる。特にだらだら・くどくどの饒舌文書には下剤が必要だと感じる事がある。

こうした状況なので、自分から発信する場合は、通信文であれ論考であれ、出来るだけ簡潔にして饒舌型の文章は避けること、また一度に乱作・多作しないように心がけてはいるが、身心が冴えないときにはダラけた文書を破廉恥に出して後悔することも時たまあるのは加齢のせいであろうか。こうした状況を周囲の人に囁かれるようになったら、この通信も終わりにしなければならないと思っている。

編集後記

★今号では、晩期の安藤昌益が抱えていた一連の諸課題を改めて整理して、自分自身が人生の晩期に入ったことで追体験的思考を加えて再検討した。晩期昌益の単身帰郷を理解するには、当の研究者自身も高齢になっての単身赴任生活を実体験してみるのが有意ではないかと思われる。

昌益の宇宙・天体観については、単に渾天説改作・有限宇宙・南蛮学統といった従来の視点に限定せず、今般は現代視点との関連も兼ねて江戸中期から後期にかけての、「多世界宇宙論」「地球外生命論」の系譜観点からの考察を加えた。稿本『自然真営道』の転定気行論巻（第 26-31 巻）が関東大震災で失われてしまった事が、改めて惜しまれる。——もっとも、その内容はやはり蘭学受容以前の天地論であった事は変わらないであろうが。

★ 10 月中旬に長野県の東部・川上村に出かけてきた。川上村は宇宙飛行士・油井亀美也氏の出身地でもあり、また標高 1200 – 1400 m の高地で外国人労働者を多数雇って高原野菜の大量栽培・出荷をして農山村地域振興を果たした典型地としても知られている。今回訪問した直接の動機も、この農山村再生に成功した先進地の現状を見学して廻るのが主目的だったが、山上高地の澄み切った星空のもとで育った油井さんが少年時代から宇宙に目を向けたのも納得できた。

この山上高地は千曲川の源流域であり、旧石器時代から人々が住み着いていたとのことで、実際に縄文時代中期に標高 1300m のところに大きな集落が築かれた遺跡＝大深山遺跡もある。江戸時代には野生リンゴ「りんき」を周辺各地に売り出していたという。また「川上犬」の発祥地でもあり、こうした重要な歴史遺産・文化遺産も擁している。明治中期に千曲川源流域の 8 カ村が合併して川上村となって以来、昭和・平成の大合併時にも周辺と合併せずに単村で通してきたとの事で、こうした経過も注目し値すると思う。現在、東京都町田市・武蔵野市・三鷹市それぞれの保養施設が村内に造られている。こうした誘致活動を行って農山村と都市の交流・結合を意図したのも、地域おこしの一環であろう。

★本年はアインシュタインの一般相対性理論発表 100 周年の年だったので、日本物理学会や日本天文学会などの企画で、各地で多彩な記念行事が催された。これに拍車をかけたのが梶田隆章・東大宇宙線研究所長のノーベル物理学賞受賞である。梶田先生の業績は直接的にはスーパーカミオカンデにおける観測から、ニュートリノに質量があること明らかにしたことであるが、現在は重力波検出に向けた実験施設建設のリーダーでもある。重力波は一般相対性理論で予言された時空の波動であり、中性子連星のパーサーの観測から実証されると共に、現在は地上でレーザー干渉計を設置して直接観測が計画されている（KAGRA, LIGO など）。当編集者が長年携わった加速器分野だけでなく、現在は宇宙線観測の分野も巨大施設を要するようになり、地下天文台という言葉まで生まれるようになった。

★湘南科学史懇話会代表の猪野修治氏のご厚意で、本誌は前号から同会の HP を通じて Web 上に載せて貰っている。そのおかげで、従来の昌益研究者関連の狭い範囲だけでなく科学史関連の人々にも関心を寄せて貰えるようになった。自分自身も最近昌益研究の世界を狭苦しく感じるようになっていたので、実にタイムリーだと感じている。昌益の思想をより広い範囲で比較思想的に研究し、できるだけ正確さを担保しつつ広い分野の人々に提起していきたい。

★本年前半での、出身地の郷土史刊行・発送作業で体力を消耗したせいか、後半期は無理が効かなくなってしまった。ひたすら体調回復に努めて何とか V 字回復に向かうことができた。安藤昌益思想研究に限らずほかにも取り組みたい探究課題は山積しているが、70 歳代に入ると、もはやあれもこれもといった欲張りにはできなくなる。自分の体力・知力の範囲でおのずと取り組み課題を絞り込まないと、成果は得られないと実感するようになった。安藤昌益自身も、晩年は余命を考えながら諸活動の収束を意図していたように見受けられる。

(2015.12.23)

